工藤まぐの人生

まぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

工藤まぐの人生

【Ｎコード】

Ｎ２０８２Ｔ

【作者名】

まぐ

【あらすじ】

２ちゃんねるの「アリの穴」と「作家でごはん！」に投稿済みで、少しだけ手直ししました。

あらすじ。

沖縄で主人公まぐと友人がプロの小説家になるとの約束をするが、友人の筆名が「木村拓哉（キムタク）」であり、キムタクは小説家としての出発点を間違って、あらぬ方向へと進んでいく。そんなキムタクを主人公は小馬鹿にしているのか、一応気を遣っているのか、複雑な気持

ちで傍観する。

コメディタッチで書いたが、自分は普段、コメディを書く人間ではないのでジャンルは文学とします。初投稿です。よろしくお願いします！

（前書き）

ツイッターの診断メーカー、「私の人生全五章」を使い、章タイトルが決まっている中で書きました。
内容より文章の実験として書きましたが、内容も、

1キャラをしっかり立てる
2ユーモアある作品にする

を意識しました。

第一章　同志の約束

　俺と友は一つの決意を同じくして、アニミズムの伝統が根付いている沖縄へ来た。だが、予約しておいたホテルに到着すると、台風が上陸してきたため、俺たちはしばらくの間ホテルに待機する他なかった。ホテルで出された沖縄の料理、沖縄そばやタコライスなど、大体は俺の味覚に合ったけど、ゴーヤだけはどうにも苦すぎて吐き出してしまった。夜、泡盛で乾杯すると、あっという間に泥酔して俺たちは暴風雨の喧噪の中でも長い眠りに就いた。

　翌朝、窓から差し込む太陽光線が閉じられた目を直撃すると、俺たちを開眼させた。そう、ランボーの詩『地獄の季節』にある「海と溶け合う太陽」を追い求めて俺たちは沖縄まで来たのだ。台風が過ぎ去ったから海岸へ、と思いホテルを出て路線バスに乗り込むと乗客は他に誰もおらず、運転手が「今、台風の目だよ」と教えてくれた。が、舞台はより整った。砂浜に足を下ろすと靴の中にまだ湿っぽい砂が入り込む。更に眼前では台風によって神々しさを増した波が、そして天上では台風の目が見てくれているのだ。暑さでとろけるような景色はまさに「海と溶け合う太陽」、その下で俺たちの小指が絡み合って自然と揺さぶられた刹那、新しい自分が脈を打ち、小説家「工藤まぐ」が誕生した。

「今、この瞬間から俺は工藤まぐだ。まぐと呼んでくれ。よろしくな」

「俺はきむらたくや。キムタクって呼んでくれよな」

「は？　きむらたくや？　って木村拓哉だよな？　お前、筆名にそれはないだろ」

「え？　いや、俺は元祖木村拓哉に検索エンジンで勝てるよう頑張るという意味で木村拓哉に決めて気に入ってたんだけど……」

「小説家が木村拓哉と戦ってどうするんだ？　て言うか、お前、思い出したけど、こないだキャバクラ行った時、キャバ嬢に『キムタクって呼んで』とか言ってたよな？　そしたらキャバ嬢はウケた振りしてくれててお前はにやけてたけど、それと何か関係でもあるのか？」
「良くぞ見抜いたな。そうなんだ、俺はあの時のキャバ嬢、じゅりちゃんに一目惚れして、彼女のケータイのメモリには俺の名前がキムタクで登録されている。俺にはこの上なくスイートな、いやスゥィートな思い出なんだ。穢さないでくれ」
「お前、語学堪能で早くもプロ気取りか。まあ良い。お前の思い出を穢すつもりはない」
　と言いつつ、俺は思った。この男は出発点を間違っている。ススキノの安キャバクラから出発した者は、ブサイクばかりの安キャバクラから出ることが出来ず、結局、高い延長料金を払った末に、これなら初めから高い店に行った方が良かったと後悔するのだ。他方、俺はと言えば、この南国から出発して、温まった懐を故郷ススキノのキャバクラまで持ち帰るのだ。それも、以前よりも遥かに高級でハードなキャバクラまで。俺は高級キャバ嬢に言う。
「次回作は君をヒロインにして書こうと思うんだ」
その後、小説はベストセラーになり、結婚し、二児を儲け、子供とキャッチボール、……などと妄想していたら、
「なあ、まぐ、……俺、プロになったらその娘に結婚を申し込もうと思うんだ」
　とキムタクがほざく。駄目だ、こいつは志が低すぎる。少年ならば大志を抱くべきだと俺たちの先達が言っているではないか。目を覚まさせなければならないと思い、俺はテキトーな嘘をついた。
「……て言うか、あの娘、あんだけ可愛いんだから男いるのがフツーじゃないか？」
「え？　そういうもんなの？」
　キムタクは世間を知らなすぎる。いつも上手いことはぐらかされ

るがまだ童貞だろう。
　暴風雨がやって来た。

第二章　そんなことない

　北海道に戻ってくると、退学届を大学にテレビドラマよろしく叩きつけてやろうと思ったが、結果としては理由欄の「経済困難」に丸を付けたのち、キムタクと「赤信号　二人で渡れば　怖くない」と言わんばかりの心持ちで無愛想な事務員に手渡しした。こうして誕生したニート二人は社会の右側から見れば単なるゴミだが、左側から見れば社会の犠牲者である。そして社会全体を上から見下ろすこと、それが小説家の取るべき政治的立場だと俺は考えている。
「なあ、まぐ、今どんな気持ちだ？」
「ああ、何だかすっきりしたよ。キムタクは？」
「俺もすっきりしている。そして解放感のおかげか、キャバクラに行きたい気分だ」
「お前は毎日そんな気分だろう」
「そんなことない。俺にとって、キャバクラに行くのは楽しむためじゃない。言わば、取材のためだ」
「ほう、……では指名しないんだな？」
「そんなことない、指名は大切だ。一人の人間を理解出来ない奴が多くの人間を理解出来ると思うか？」
「勝手にしやがれ！　俺は指名などしない」
　その後、お互いの家に帰宅し、シャワーを浴び、爪を切り、歯を磨き、お気に入りの服を着て、髪をセットし終えると準備は整って、俺たちは七時半、地下鉄北十二条駅のホームで待ち合わせた。ガラガラのホームに着くと、頬を真っ赤に染めて不敵な笑みを浮かべたキムタクがすでにふらふらよろめいている。
「お前、何をにやけている？」
「ふふふ。今日、じゅりちゃんに店行くとメールしたら凄く喜んで

いたからな」
「そんなもん当たり前だろ、向こうは営業だ」
「ふふふ。お前は知らないだろう？　じゅりちゃんの本名を？」
「メールしてないんだから知る訳ないだろ。何て言うんだ？」
「ふふふ。山田愛子だ！」
「随分と地味な名前だな。店ではちゃんと源氏名で呼べよ」
「そんなこと分かっている」
「てかお前、もうどんだけ飲んだ？　酒を飲むのは良いが臭すぎるぞ」
　と俺が言うと、ピンポーンという音と共に暗がりから轟音が向かってくる。姿を現した車両が俺たちに強風を吹き付けると、キムタクは長い前髪を大仰にかき上げた。この男の本気度が伝わってきて、痛々しかった。
　ススキノ駅に着くと、待ち合わせの名所「ロビ地下」前にいる人、人、人、には目もくれず、外に出ても、巨大なビル看板、ＮＩＫＫＡやＫＩＲＩＮや常口アコムにもはや驚くこともなく、田舎出身の俺たちの足は向かうべき場所を覚えている。今日、ススキノ交番横で「激安！　１７００円！」と書かれた段ボール製の看板を頭に掲げているのは、二十歳の俺たちと同年代だろう兄ちゃんである。俺は慣れた感じで声をかけた。
「お兄ちゃーん！　割引チケットちょうだーい！」
「あ、また来てくれたんですねー、案内しますよー」
　と言う訳でキャッチの後ろを付いていくと、店内は真っ暗、すなわちダウンタイム中である。分からない人のために説明しておくと、ダウンタイムとは店内が十分間ほど真っ暗になり、キャバ嬢のおっぱいを触れる時間のことである。道外では「セクキャバ」と呼ぶらしいが、ススキノで「キャバクラ」と言えば全店が「セクキャバ」を意味する。俺はキャバ嬢と話したり、酒を飲み交わすのが好きなので、ダウンタイムがあまり好きではない。
　キャッチの兄ちゃんに代わって、ボーイが四人用のボックス席ま

で案内すると、飲み物を聞いてきて「ビール二つ」と答えるのが例のことで、それから、どんなキャバ嬢が来るかとワクワクする。だから俺にとっては指名をするなど考えられないのである。
「よろしくお願いしま～す」
キムタクが指名したじゅりちゃんより早く来たキャバ嬢が俺の太ももに脚を乗せると名刺を渡してきた。
「レイラで～す。お名前は何て言うんですか？」
「まぐって呼んで」
源氏名からして俺をうんざりさせた。カタカナで「レイラ」なんて源氏名は大抵がビジュアル系好きで、俺のようなインテリにはまず興味を持たないと決まっている。その上レイラは、55キロの俺より体重があるのは間違いなく、太ももが痛いし、暗がりの店内でもはっきりと分かる乱れた歯並びがキスする気をなくさせた。
「いやー、レイラちゃん可愛いねー」
と癖っ毛の髪を撫でながらお世辞を言っておくと、キムタクが真顔で、
「まぐ、……俺、お前がまじ羨ましいんだけど……」
と言ってきたので心の底から引いた。
「お前にはじゅりちゃんがいるだろ」
「え～、お友達さん、じゅりちゃん指名したんだ～」
「そうそう、こいつ、じゅりちゃんといつか結婚するのが夢らしい」
「ははは超ウケるんだけどお～」
「ちょっと、まぐ！　それは言うなよ！」
と、じゅりちゃんが来てキムタクに「今日はありがとう～」と言っているが、顔を情けなくほころばせたキムタクが痛々しかった。
以前は自分に付いたキャバ嬢に夢中で気付かなかったが、じゅりちゃんは、小結、いや、大関、いや、横綱だった。
「ちょっと～、レイラ聞いて～、彼はキムタクって言うんだよ～！」
「ちょっと嘘～！　でも髪長いから良く見ると面影あるかも～」
キムタクがにやけている。

四人で話すのはすぐ切り上げるのがフツーで、以降、レイラと話していると、やはりビジュアル系が好きらしく、名前の知らないバンド名を連呼してくる。人の話を全く聞かずに自分のことばかり喋る、どちらが客なのか分からないようなキャバ嬢がこの安キャバクラにはたまにいて、レイラもその内の一人だった。話題を変えるべく、「好きな小説家とかいる？」と聞いたら「山〇悠介は凄く面白いよ！」と、今度は『リ〇ル鬼ごっこ』の面白さを語り始めた。プロの小説家志望なら聞きたくもない名前だというのは理解出来るだろう。俺はもう辟易して、一応ダウンタイムにおっぱいだけ触ったらさっさと帰ろうと思った。１７００円だから飲み放題に行ったものだと考えて、ビールばかりおかわりした。

「お客様、お時間になりましたがどうします？」

「ああ、俺は帰るけどキムタクは？」

「延長してくれるよね～？」

とじゅりちゃんが言うと、キムタクは満面の笑みで、

「勿論です！」

と言い切った。

「じゃあ、一人で楽しんでくれ」

「え～、まぐさん帰っちゃうの～？」

高い延長料金によって儲ける店でしつこいから、意志表示ははっきりした方が良い。

「帰るよ。明日仕事だから」

「そうかあ～、残念」

それからレイラに見送られた俺は店を出てから地下鉄に乗り、北十二条駅に着くと急いで帰宅してベッドに就いた。ビールを十杯ほど飲んで泥酔状態の俺はすぐに眠ったのだが、しつこい着信音が耳障りで目が覚めた。ケータイに手を伸ばすと十件以上の着信があり、時間は深夜一時過ぎ、相手はキムタクからだった。

「こんな時間にどうしたあ！？」

「いやさ、じゅりちゃんに『アフターで寿司食べに行こう』って言

ったらオッケー貰ったから十二時に店の前で待ち合わせしたんだけど、一時間経っても来ないし、ケータイで連絡も付かないんだよね。何かあったのかなあ？」
「一時間!？　お前は阿呆か！　じゅりちゃん、お前とアフター行くの嫌だけど断れないから一応オッケーしただけだろ！」
「は！？　何言ってんのよ!？　じゅりちゃんに限ってそんなことない！　本名知ってるんだし！」
　この男をネタに『幸福論』でも書けると思った俺は、
「まあ、そんなことない、……かもな」
と言った。するとキムタクはいつにない断言口調で、
「絶対にそんなことない！」
　言ってから、
「一応始発までは待ってみるわ」
と続けた。この根性の向かうべき場所が正しければ、キムタクは間違いなく小説家になれる。

第三章　成熟

　ピンポンの連打とドアを叩く音によって目を覚まし、掛け時計に目を遣ると、まだ午前七時で、ＮＨＫか新聞の勧誘かと思い居留守するつもりだったが、ドア越しから「キムタクだ！」という声が微かに聞こえてきてドアを開けたら、この男は目が血走っていて随分と興奮した様子だった。
「何、お前、ホントに朝まで待ってたの？」
「聞いてくれ！　聞いてくれ！」
「何よ？」
「結局、朝六時になって帰ろうと地下鉄乗ったらじゅりちゃんが他のキャバ嬢たちといたんだよな！　何か気まずいから隠れたんだけど、ちょっとじゅりちゃんがどこで降りるのか付いていったんだ。そしたら、じゅりちゃんのマンションが分かった」

「はあ？　お前、それはストーカーという奴だぞ」
「な訳ないだろ！　本名も自宅も分かって、これで俺とじゅりちゃんは結ばれる運命なんだと確信したよ」
「おめでたい奴だ。犯罪だけはするなよ。て言うかすでに犯罪者か」
「ふふふ、君には分からないのだよ。俺たちは運命の赤い糸で結ばれていることが」
「分かった、分かった！　二日酔いでまだ眠いから帰ってくれ」
「それだけ伝えたかっただけだ。じゃあまた」
「じゃあな、犯罪者」
その数日後、小説を書いているのかどうかを知るべく俺はキムタクのマンションへ行った。この男は親が有名な農家のため金持ちで、親から相当な額の仕送りを貰っているらしく、キャバクラ代もたまにおごってくれるのだが、それを良いことに自炊を全くせずピザの宅配で食事を済ますことが多い。それはまだ良いとしても、掃除も全然しない、興味のあることしかしない怠け者で、ピザの空き箱やらビールの空き缶やらで室内はまるでゴミ屋敷である。
「おい、お前、こんなところで小説が書けるのか？」
「いやさあ、大学辞めたし、ここ汚いし、良い場所に引っ越そうと思うんだよね」
「お前、まさか、……」
「何？」
「じゅりちゃんのマンションに引っ越すつもりじゃないだろうな？」
「それは秘密だ！」
「何故隠す？　じゅりちゃんとはその後は？」
「何か謝ってきたよ。仕事が終わらなかったんだってさ。まぐの言うことはやはり当てにならんな。結局、じゅりちゃんはキャバクラ辞めて美容師の資格あるから美容室で働くらしい。ふふふ、俺の髪もそこで切って貰う予定だ」
「何だ、キャバ嬢辞めても営業か」
「もはや営業ではないことは一目瞭然だ！」

「そうか……。良かったな。ところで小説は書いているのか？」
「ああ、書いている。しかし完成するまで見せることは出来ない」
「なら良い。俺も書いているが、小説っていざ書くとなると難しいな」
「今の若者は言葉が乱れているからな。まずは正しい日本語を覚えることが大事だな」
「それはそうだな」
その後、キムタクは友人が一人もいないはずの区に引っ越した。結果、キムタクとは家が遠くなって会う機会も減ったのだが、実際問題、遊んでいる場合ではなく、俺は小説の執筆に専念し、約半年間をかけて一作を仕上げた。原稿用紙換算で四百枚にも及ぶ大作だ。執筆期間は非常に孤独だったし、自作が面白いのかどうか他人からの評価が知りたくて俺は引っ越したキムタクの家へ向かった。
「ピンポーン」
と家の中から聞こえると、乱雑な足音まで聞こえてきた。
「誰？」
「まぐだけど」
ドアを開けたキムタクは半年前と比べて全くの別人で、ボサボサの髪に伸びきったヒゲ、クスリでもやっているのかと疑うほどのトロンとした目つき、そして何よりワキガの悪臭を漂わせていて、気持ち悪さから俺は一歩退いたが、キムタクはふいに俺の腕を鷲掴みにした。
「丁度良い時に来た！　今日、ついに俺の処女作が完成したんだ！」
「ホントか！？　実は俺も一作書き上げたんだ。お互い見せ合おうじゃないか」
と室内に入ると、またピザの空き箱とビールの空き缶だらけで、以前と全く変わっていない生活は引っ越しの無意味さを思わせたが、キムタクにはこれ以上ない意味があったのだろう。俺がプリントアウトした原稿をキムタクに手渡すと、キムタクは一ページも読み終わらない内に、

「こんなんじゃ全然駄目だ！　お前は言葉が乱れすぎている！」
と怒鳴った。俺は「てにをは」を勉強したし、辞書を引いたし、推敲を頑張ったし、そう乱れた言葉を使った覚えがなかった。
「は！？　どこが乱れているのよ！？　全く納得行かないんだが、……」
「ふははは！　俺が昨日徹夜で仕上げた処女作を読んでみたまえ。これが小説というものなのだよ」
キムタクは不敵な笑みを浮かべながら、俺に随分と分厚い原稿、おそらくＡ４用紙五百枚ほどを渡してきたので、俺はその分量に驚かされた。こいつ、もしかすると天才なのかもしれない、と思ってドキドキしながらキムタクの処女作に目を遣った。そこには以下のように書かれていた。
「我は札幌薄野にあるキャバクラに来たり。そこで樹里といふ娘に出逢ひ、恋に落ちき。恋心は止まらず、我はキャバクラに通ひ続け、延長をし、さてアフターの約束を取り付けき。我は店の前で待ち続けたが、それは大変長き時間なりき。結局、樹里は仕事で忙しかりしや、待ち合はせ場所で会ふが出来ざりき。なるが、我々の心は繋がっており、離るるがなかりき。……後略……」
俺は何か言わなければと、口を開閉させたが出る音はなく、すると自信満々のしたり顔でキムタクが、
「どうだ？　これが本当の日本語という奴だよ、君」
と言ってきた。
「え？　あ、え、ああ、そうだよな。でもこの第一人称の『我』ってどうにかならないのかな？　何か中国人みたいな気がするんだけど」
「まぐはさすがだな。実はそこは俺も迷ったところなんだ。第一人称を『我』にするべきか、それとも『小生』にするべきか……。だけど、やっぱり『我』には威厳があるんだよな」
「そうか……。凄く良いんじゃないかな。その調子で書いていくと新人賞も夢じゃないかもな……」

「今からじゅりちゃんの働いてる美容室に行って原稿渡して来ようと思ってるんだ。さあ、早く行くぞ！」
　ワキガの苦々しい臭いを漂わせたキムタクが浮浪者のような顔で言うと、俺は苦笑いをせざるにはいられなかった。確かに俺たちは共に成熟したのかもしれないが、キムタクの成熟は「同志の約束」を交わした沖縄で食べたゴーヤのそれであり、苦すぎて生(なま)でかじられるものでは決してなかった。

第四章　忘れない

　浮浪者の容貌を呈したキムタクと共に、じゅりちゃんが働いているという美容室へ向かうと「スピーディーカット　１０００円」と書かれたスタンド看板が見えてきた。
「え？　ここなの？」
「そうだ。激安だろう？　じゅりちゃんのカットの早業には目を見張るべきものがある」
「キムタク、お前、美容室って言ってなかった？」
「言ったけど、それがどうした？」
「ここは理容室であって、美容室ではない。プロを目指していて、その位の違いも分からないのか、お前は」
「ふう、……まぐは何と言うか、細かい性格してるんだな」
「そうではない。こんなことは一般常識だ」
「まぐの言うことは当てにならんからな」
「なら良い」
　じゅりちゃんの巨体でお洒落な美容室が雇うのだろか？　と訝っていたのだが、これで全て合点が行った。しかし、キムタクは浮浪者のような格好で、その上、Ａ４用紙の原稿五百枚ほどを持参してじゅりちゃんに会いに行こうとするとは、尋常ではない鈍感さである。しかし、じゅりちゃんもじゅりちゃんで、キャバ嬢を辞めたならこの不潔極まるニートをさっさと見捨ててくれれば良いものを、

そうしないからキムタクは調子に乗るのだ。

　店内に入るとじゅりちゃんの姿が見当たらない。キャバ嬢を辞めたとて、その相撲取り並みの図体で見分けることは出来るはずだが……、と思っているとキムタクが男性店員に尋ねていた。

「あの、今日は山田さんはお休みですか？」

「山田さん？　そんな人はウチの店で働いてないですけど」

「え？　山田愛子さんですよ？　一か月前までは働いていたんですけど、……」

「いやあ、働いてませんねえ」

　なるほど、と思った俺は、

「えーと、あの何と言いますか、関取みたいな女性のことです」

　と言った。

「ああ！　二宮さんのことね！　今日はお休みなんですよ」

　キムタクを見ると、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして、それから頬をパンパン叩いて夢から覚めようとしている。そうだ、早くお前は夢から覚めるべきなのだ。

「キムタクよ、……残念ながらこれが現実だ」

「ん？　じゅりちゃんって偽名使って働いてるんだな。ちょっと拙いこと聞いちゃったかな？」

「……ああ、そうかもな、……」

　この男は夢から覚める様子が全くない。じゅりちゃんにどんな拒絶の方法をされたとしても覚めることはないだろう。

　ニートとは言え千円カットには少し抵抗があったのだが、せっかくなのでカットして貰うと案外上手い仕上がりで、なるほど、どうりでこれは流行る訳だ、と満足出来た。その帰路、俺たちは新人賞への応募について話した。

「キムタクの処女作、長すぎて募集してるとこ限られてくるんでない？」

「大丈夫だ。下調べはしっかりしている。講〇社のメフ〇スト賞は枚数の上限がなしだ」

「メフ○スト賞ってミステリとかが主に取る賞じゃね？　お前の作品、恋愛ものの私小説、と言うか妄想小説だろ？」
「大丈夫だ。調べる限り、ジャンル不問だから俺のレベルなら受賞確実だろう」
「ふーん。俺のも長いからギリギリ大丈夫な文○賞に応募してみるよ」
　それからお互い処女作を応募して数か月が経過すると、日々緊張の度が増していった。2ちゃんの情報によると、一次選考通過者にはそろそろ電話が来るはずだと思いながら、一日、二日、三日、……と過ぎていったが、ケータイの着信音は鳴らなかった。一週間ほど過ぎたのち、ようやく着信音が鳴って、すぐさまポケットからケータイを取り出すと、それは登録されていない番号からの着信で、俺は受験の時にも、好きな女性に告白する時にも味わったことのない胸の高鳴りと共に通話ボタンを押した。
「はい、もしもし」
「俺だ！」
「キムタク？　何だ、お前かよ」
「何だとは何だ。俺は今かつてないほど憤っている！」
「どうしたんだ？」
「メフ○スト賞から俺の作品の短評が届いた」
「まじ！？　どうだった？」
「今からまぐの家へ行く！」
　三十分ほど経ってキムタクが来たのだが、酒の臭いがおぞましいまでにぷんぷんと漂ってくる。これはただ事ではない、否、結果は予測出来たことであり、覚悟しておかなければならないことだったのだ。部屋に入ると早速キムタクが封筒から紙を取り出した。
「これが短評だ」
「何々？　『この小説、いや小説と呼ぶにはあまりにもおこがましいこの原稿は、現代文と言うよりは古文であり、古文と言うよりは作文であり、作文と言うよりは駄文と呼ぶべきでしょう。まずは日

本語を覚えるべきだと思います』、ふむふむ、これは素晴らしい短評だ」
「素晴らしいんじゃねえんだよ！」
とキムタクがブチギレて、手に握っていたケータイを真っ二つに割ると、
「しまった！　これで二回目だ！」
と言い、もはや制御不能状態のようで、こういう奴が現実を目の当たりにすると何を仕出かすか分からないと俺は思った。
「おいおい、まだ処女作だぞ！　一発で賞を取るのは難しいだろ」
「いや、俺はこの処女作に賭けていたんだ！　俺は今、講〇社爆破計画を練っている」
「何がお前をそこまでさせた？」
「初めこれを読んだ時、ケータイを真っ二つに破壊したのだが、そのせいでメモリが消えてじゅりちゃんの連絡先が分からなくなった。それが一番の原因だ」
「千円カットに行けば良いんでない？」
「それがどうやら辞めたようで、……しかもいつの間にか俺の住んでいるマンションから引っ越していた」
「やっぱりそうだったのか、……。とにかく講〇社爆破計画は中止しろ！　と言うか一般人が爆破させるなんて不可能だろう」
「ふふふ。お前は『ファイトクラブ』という映画を観たことがないな？　石鹸から爆弾は作れるのだよ。ネットでも調べたら簡単だった。大量の石鹸をすでに集めたから、それを東京の友人宅に郵送し、その後に爆弾を作ろうと思っている。ちなみに飛行機のチケットはすでに手配してある。俺とまぐの分だ！」
「お前、随分具体的だな。てか俺のチケットまで取るな、共犯になるつもりはない」
「『同志の約束』をした仲だろ？　俺たちは運命共同体だ！」
「ふざけるな。一人で勝手に行け」
「そうか、まぐは薄情な奴だな。じゃあ一人で行く。俺は近い内に

有名人になるだろう」
「確かに新聞やテレビでは報道されるだろうな」
「ああ、俺は捕まる。そして俺の人生は一変する」
キムタクが涙ながらに言うと、握手を求めてきたので応じた。
「これで最後だな」
「ああ、またいつか、会えたら会おう」
「お前のことは忘れない」
「俺も忘れない」
これが俺たちの別れの言葉で、キムタクが玄関を出る時に最後振り返ると、飼い主との永遠の別れを悟った犬のように寂しげな目で俺を見た。そのキムタクの視線によって俺の涙腺は講〇社よりも一足早く爆破され、俺は一日号泣して止むことがなかった。

最終章　輝きのとなり

キムタクが東京へ旅立って一か月ほどすると、俺にとっては9．11よりも、3．11よりも衝撃的な映像がブラウン管越しに飛び込んできた。講〇社の高層ビルの一室から煙がもくもくと上がっている。
「講〇社のビルに何者かが爆弾を仕掛けた模様です！」
ニュースキャスターの「何者かが」という言葉が痛く胸に突き刺さり、これは警察に電話だと思うも、俺はブラウン管に縛られたまま身動きが取れなかった。
「死者はいない模様ですが、数名が軽傷を負ったとのことです！」
この言葉は本当に救いで、もし死者や重傷・重体者が出ていたらキムタクは牢獄の中で人生を終えるところだったろう。
「速報です！　犯人が自首してきたとのこと！　20歳無職男性です！」
自首すれば刑も少しは軽くなるだろうから、キムタクの判断も救いだった。それからもTVに釘付けになっていると、しばらくして

不敵な笑みを浮かべたキムタクがパトカーに運ばれる姿が映し出された。キムタクは高校生時代、「警察官になりたい」と言っていたのだが、皮肉にも自分が捕まる立場になっていた。大学に入った頃、俺が小説の面白さを教えさえしなければ、キムタクも警察官を目指して大学もきちんと卒業したはずなのだ。進路を変更させ、歪ませてしまった罪の重さに押しつぶされそうだった。

数か月が経つとキムタクの「講〇社爆破事件」裁判が行われ、俺も証人として裁判所に呼ばれて、キムタクがメフ〇スト賞の短評の件で講〇社に深い恨みを抱いていたことを述べた。

「あなたが事件を起こした理由はそれですか？」

と裁判長が問うと、キムタクは『異邦人』のセリフそのまま、

「太陽のせいだ」

と答えて、その一点張りだった。裁判所ではキムタクがそう答える度に爆笑が起き、これでは罪が重くなると危惧したが、俺はキムタクの言いたいがことにピンと来て、

「太陽とは彼が愛して止まない元キャバ嬢のことだと思います」

と翻訳した。

「そうなのですか？」

と裁判長が問うと、キムタクは観念したかのように軽く肯いた。

結果、キムタクには懲役五年六か月の実刑判決が下された。キムタクが獄中にいる間、俺は面会には行かなかったが、小説の執筆が終わる毎にそれを郵送した。「同志の約束」を交わした者として、こうすることが最も良いエールになると思ったのだ。その返信には「こんなんじゃ話にならん！」と一言だけ書いてあることが常で、実際キムタクの評価が一般的かどうかは別としても、俺の小説は一度たりとも一次選考を通過しなかった。おおむね、小説とその短評だけのやり取りだったのだが、キムタクから一度「俺は出所したら有名になる！」との手紙が来たことがあった。

事件から六年近く経ち、キムタクが出所すると札幌に来て、俺の家にしばらく居候することとなった。

「久しぶりに見る顔だな」
「まぐの顔も久しぶりだ」
「これから何かアテはあるのか？」
「ああ、実は獄中記を書いていて、それを出版することになった」
「まじで！？　どこから出版するの！？」
「講〇社からだ」
「は！？　爆破事件を起こした出版社から出版とかあり得ないだろ」
「それがあり得る。どうやら話題性抜群とのことだ」
「確かに話題性は抜群だな」
「これで俺もプロの作家として食っていける」
「まあ二作目以降が大事だと思うが、禍転じて福となす、だな」
キムタクの獄中記『季節は地獄なりき』（ランボーの詩からタイトルを拝借したとのこと）は、爆破事件が起こった月日に出版された。その内容は、獄中でも毎日じゅりちゃんのことを想っていた、とのことが主で、文章も古文調のままだった。しかし、『季節は地獄なりき』は売れに売れ、瞬く間に百万部を突破した。大ベストセラーとなったため、コメンテーターが何故売れたのかを分析していたのだが、それによると、手の届かぬ娼婦への一途な想い、そしてそれを古文調で綴ってあることが日本の伝統を思い起こさせて日本回帰のブームまで巻き起こしているとのことだった。キムタクはその後もじゅりちゃんへの想いを古文調で綴った小説を書き続けて、それらも売れに売れた。
獄中生活から一転、大金持ちとなったキムタクのことを俺は複雑な気持ちで見ていた。キムタク出所後も俺は小説を書き続けていたが、一度も一次選考を突破出来なかった。ふと、独り言のように呟いたことがある。
「どうしたら小説家になれるんだろうなあ？」
「まぐ、小説家には個性が必要なんだ！　お前は常識に縛られすぎている！」
「え？　ああ、そうだな、キムタクには個性があるよな」

「それからだ！　小説家とは露出狂で執拗な人間だ！　俺は恥ずかしげもなく、じゅりちゃんへの想いを綴っている！　しかもそれだけしか書いていない！」
「確かに俺は恥ずかしいことは書けないし、一作書いたら次に行くけど……」
「結局、まぐは自分のスタイルを持っていないんだ！　マンネリと呼ばれようともまずは自分のスタイルを持つことが大切なんだ！」
「え、あ、ああ、その通りだと思うが、お前、良いこと言うようになったな」
「良いことなんて言ってない！　さあ、キャバクラ行くぞ！」
「たまの気晴らしはやはりキャバクラに限るな」
　昔のようにススキノに到着すると、キムタクが先頭になって付いていったが、こいつは「激安！　１７００円！」の看板を掲げた兄ちゃんを無視して「ナースステーション　１セット１０００円」と書かれた看板のキャバクラに入ろうとした。
「おい、俺そんな金ないぞ」
「今日は俺のおごりだから気にするな」
「あ、ありがとう」
　と言う訳で、キャバクラに入ると、キムタクが何やら指名をしているようだった。こいつ、良く夜に出掛けると思ったら高級キャバクラに通いまくっていたのか、と考えながらボックス席に移動すると、キムタクにスレンダーで物凄い美女が付いた。これは！　と思って名前を聞くと、
「じゅりで～す！」
　と返ってきて、事態を把握出来なかった。
「じゅり！？　え！？　キムタク、どういうこと？」
「ああ、俺が愛し続けているあのじゅりちゃんだよ」
「見た目が丸っきり変わっているが、……」
「ダイエットしたんですよお～」
「そ、そうなんだ。整形まではしてないよね？」

「ははは！　してる訳ないじゃないですかぁ〜」
「いや、なら良いんだ」
「まぐ、人間は変わるんだ！　おぞましいほどに変わるんだ！」
「お前、何、アツく語ってるんだ」
「脱皮しない蛇は滅びる！」
とキムタクは、ニーチェの『ツァラトゥストラ』のセリフをしたり顔で言った。それからダウンタイムに入って店内は真っ暗になった。だが、今となってはキムタクもじゅりちゃんも目が眩むほどに、それは「海と溶け合う太陽」のように輝いていた。俺はジャン・ジュネを思い出した。終身禁固刑まで求刑されるも、サルトルやコクトーの請願により恩赦される、犯罪を繰り返してきた作家である。
俺には犯罪は出来ないし、してはいけないと思っている。が、俺は心の中で美談ばかりを追い求め、思い描き、それを小説に書き続けてきた。これからはその輝きのとなり、日の当たらぬ底なし沼の穢れを苦痛と共に描いていかなければならないのだ。
真っ暗なダウンタイムが終わって薄い光が灯った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2082t/

工藤まぐの人生

2011年5月12日11時39分発行